

# ART ESSAY

アート★エッセイ

## なんとなく順接



山口 晃  
(画家)

撮影：  
松蔭浩之

和牛を育てる農家の人は、其の仔牛をうんと可愛がるんだそうである。売られて食べられてしまうものを、其んなに可愛がっても仕方ないじゃないですか、なんぞと聞くに困ったようにホホえむんだそう。大事に育てると情が移るのか、情がないと大事に育てられないのか知らぬが、そうすると結果肉質もよくなり、高値がつくんだそうである。なんだ、やっぱりそこかと言はれそうだが、そう云うのがたまたまのオマケである事を、絵描きの私は何となく解るのだ。

絵描きで食べてゆくと云うのは、描いた絵を売って金にかえると云う事である。苦労して描いたのに人手に渡ってしまっは寂しくないですか、何ぞと聞かれるが、其んな時は困った顔でホホえむ訳である。そりゃあ勿論さびしいが、そうしないと食ってゆかれない。苦労して描けば情も移るし、良い絵にしようと思うから苦労もする訳である。そして其う云う絵から買手がつく。なんだ、結局そこかと言はれそうだが、和牛農家の方の心持ちが何とな

く解ると云ったのはそこで、やっぱり其う云うのはオマケなのである。

なに、これは別にキレイ事を申しておるのではなく、また、自体と直接関係ない故色んな所に介在できると云うお金の性質を申しておるのでもない。

人間の暮らしと云うのが、色々な時代の寄せ集めで出来ている上に、当の人間が場当たりの進歩の産物である。全く関係ないものをズダ袋に放り込んで素知らぬ顔で生きてゆくには、無自覚な転換を接着剤として己を保つしかないのである。整合性だとか論理性なんて云うものは、要素限定下に表れるマボロシみたいなものだ。

オマケの後ろに更にオマケをくっつけてゆくしかない可笑しみや哀しみが、絵の題材になったりする。絵描きはそこいら辺の事には寛大である。であるが、世間さまがそうとは限らないので、こちらは程々にせねばと、最近気付いたところだ。

(やまぐち あきら)



邸内見立 洛中洛外圖 2007 80×130cm カンヴァスに油彩、水彩、墨  
撮影：宮島 径 ©YAMAGUCHI Akira Courtesy Mizuma Art Gallery

## 特集

### 新学習指導要領の〔共通事項〕がわかる！

第 2 回

### 〔共通事項〕がわかる！ — Part2

## 共通言語たる〔共通事項〕の共通理解と共通実践を

我々を取り巻く現代社会は「二極化」をキーワードに語られることが多くなった。教育における学力格差もまた「二極化」の方向で広がりつつあると言われている。特に、義務教育段階における学力の「二極化」の進行は極めて大きな問題であろう。

図画工作・美術は、子どもたち一人ひとりの個性を尊重し、資質・能力を伸ばす教育を展開してきた。結果として表れる子どもたちの学びは、「二極化」ではなく「多彩化」である。反面、その「多彩化」故に、図画工作・美術で育成すべき学力を明快に語ることの難しさもあった。「できる・できない」や「正解・不正解」ではない、「よさ」や「美しさ」「魅力」「持ち味」など、一人ひとりの多彩な学びをそれぞれの資質や能力の表れとして認めてきたからだが、これを世の中に理解してもらうことのいかに難しかったことか。明快に語ることのできない己に悔しい思いをした関係者も少なくないであろう。こうした中、今次の改訂で〔共通事項〕が新設されたことは朗報といえる。

〔共通事項〕は明快かつ平易な言葉で、図画工作・美術の学習の基盤となる指導事項を示している。社会にも受け入れてもらえやすい内容である。今後、この〔共通事項〕を共通言語として社会へ発信することが重要ではないか。関係者は図画工作・美術教育の必要性を社会へ知らしめる格好の言葉を手に入れたのだ。格差としての「二極化」を食い止め、「多彩化」ならではの豊かさを具現化するために、今こそこの〔共通事項〕の共通理解と共通実践が求められるときであろう。

ちなみに、〔共通事項〕は(共通事項)ではないという。「共通事項」でもなければ『共通事項』や【共通事項】でもないという。〔 〕の括弧で示す〔共通事項〕というこだわりを大切にしたいものである。共通言語としての説得力を高めるためにも。

# 〔共通事項〕を生かす図画工作、美術の授業実践

兵庫教育大学大学院教授 福本 謹一

## 1. はじめに

〔共通事項〕をどのように授業に生かすのかについて、移行期に向けた実践研究が行われはじめていますが、「〔共通事項〕をテーマに目標設定をした」とか「〔共通事項〕の造形要素を生かして」といった表記が見受けられる。こうした状況を見ると、〔共通事項〕が十分理解されずに実践化されることが危惧される。

〔共通事項〕を表現や鑑賞の内容事項とどう関連づけて考えればいいのか、また授業場面でどう位置づけていくのかについて十分検討しておく必要がある。形や色(色彩)、造形的な特徴、イメージといった用語だけを取り上げると、造形要素や造形原理が指導事項であると短絡的に捉えてしまうことになりかねない。〔共通事項〕は、直接的な指導事項とみなすこともできるが、題材名の工夫、造形活動場面、発問・助言、ワークシートの活用、相互鑑賞場面の設定、評価言、展示資料、学習環境設定など、授業編成から授業展開のあらゆる場面で形や色に着目させ、造形的な特徴を意識化すると同時に、イメージを豊かにさせるものとして位置づけることが重要である。

また、〔共通事項〕は、新学習指導要領の目玉であるために、他の指導事項よりも重点的に指導されるような優先事項と理解される向きもあるように感じられるが、あくまで指導全般の中で、子どもたちが造形に対する意識を明確にもちながら活動に取り組む中で押さえるべき事項であることを忘れてはならない。

〔共通事項〕が設定された背景は様々であるが、義務教育の9年間を貫くと同時に、表現や鑑賞活動を通して共通して育成すべき資質や能力を示している。〔共通事項〕に限らず、中学校美術科での内容「A表現」における創造的スキルの一元化など

の改訂事項が目指すものは、教科理念をより具現化することのできる実体的な指導指針であるとともに、実践の改善のモーメントを強く志向しているものである。すなわち、感性や情操の育成を希求する美術教育の理念が実践場面に浸透していたと言えない実態を変革しようとする強い意志を表明していると理解される。これまでの作品主義や一部の定型的な教授方法といった表現活動の成果に価値を置くような実践や鑑賞教育の低迷といった状況を反省的に捉えると、美術教育がこれまで義務教育9年間を通して児童・生徒に求められる教育的意味や学習者としての資質・能力の育成を図ることに十分徹してこれたのかどうか、この学力重視の時代にあらためて問われているのである。

学校と美術館の連携、造形ワークショップの展開など、ジャーナリズム的な意味では、美術教育は活発化しているし、芸術に対する好意的な感情や潜在的なニーズも社会的には存在する。しかし、学校という枠組みにおける美術教育を考えると、中学校美術科における選択制の問題は水面下に潜行したままであり、非常勤教師の増加など課題は多い。こうした状況を変えていくためにも〔共通事項〕をはじめとする学習指導要領の改訂の趣旨を生かして授業改善要求に応えていくことは、我々美術教育に携わる教師の使命である。

その意味で、〔共通事項〕は、従来の題材内容の見直しや新たな取り組みを具体化する上での重要な鍵となる。ここでは、授業実践の改善を図る題材開発の視点に立って、〔共通事項〕を授業実践に生かすための方途を模索してみたい。

## 2. 工作授業(中学年)における〔共通事項〕とイメージの変容

まず、工作授業「ひみつのすみか」を例に授業

改善の方略と〔共通事項〕の押さえについて検討することにする。

この「ひみつのすみか」の教師の授業設計は、木を使った工作を念頭に置いて題材開発をする際に、ツリーハウスを想定した作品のイメージをもとに行われたものである。



主材料として「ツリー」用に木の枝(自然材)1本、そして「ハウス」用に1cm角の角材(加工材)数本が用意された。教師の側に1本の木の上に建つハウスというイメージがあるために、このような材料の準備が行われた。

ツリーハウスが発想の起点にあるとしても、教師は「秘密のすみか」という題材名の設定によって概念的なイメージ(ツリーハウス)の拡張を目指そうとした。「秘密の」という形容詞に拡散的思考を誘発する機能を持たせた題材名である。

〔共通事項〕をもとにした授業改善の方向性としては、ツリーハウスに起点を持つ題材の性格を特に形や色、イメージの点で見直すことである。特にイメージに関しては、題材名の「秘密の」が個別的で柔軟な発想を生むものとして期待した方略の一つになっているが、教師側にあるツリーハウスというイメージを払拭しなければ、その効果は期待できない。木のイメージと、すみか、もしくはすまい(ハビタ)の部分を個別に概念くたきすることが鍵となる。〔共通事項〕の押さえとして、「イメージ」というキーワードは、どのようなイメージでもよいわけではなく、そのイメージの質的変容を問題としなければ意味がない。



木のイメージについては、以下のようなイメージの類型を考察することができる。

- 憩い場モデル(木漏れ日、緑陰、木陰、癒し)
- 象徴的モデル(擬人化、育み、知恵の木、聡明)

- 遊び場モデル(ログハウス、隠れ家、秘密基地)
- 成長するモデル(系統発生、樹形図)
- 心理投影モデル(バウムテスト)
- 形態学モデル(柳、バオバブなど)

このような類型化は一見すると主観的な整理に見えるが、絵本を例にすると、「大きな木が欲しい」(遊び場)、「木はいいなあ」(憩い)、ジャックと豆の木(成長)、「歩き出した木」(擬人化)、「バオバブ」(形態)、「Giving Tree」(擬人化)、「木」(形態)など、木とイメージとの関わりを示す事例が多くあり、木についてのイメージを拡張する上で有用と考えられる。



木の形態的特徴に関しても、日常的な情景としての木から、現実の木における種類の多様性(バオバブ、モンキーポッドなど)を知ることによって、「へー、こんな木もあるのか」といったようにイメージの広がりも行われる。さらに空想的イメージ(「ジャックと豆の木」など)を期待するには、イフ表現のような想像技法を用いることで、「もしも、雲まで伸びる木があったら」、「もしも、木の中をエレベーターで動くような家があったらいいのに」といった空想イメージを掘り起こすことが可能になる。

一方、すみかやすまいのイメージもゆさぶられる必要がある。子どもが目にするすまいのイメージは、TVや図鑑などの外国の風景やゲームの中に存在するすみかの諸形態によって既にイメージの潜在的な広がりや既知情報の一部に組み込まれているが、こうした子どもたちのすまいのイメージは、ディズニーランドのトゥーンタウンにあるような想像的なものに変化することはあまりない。

その理由は、子どもたちのイメージが現実には、様々な条件やコードによって制約を受けているからである。例えば、事例題材のように主材料、副

材料の範囲、時間制限といった物理的制約から教師が暗黙に伝達する完成作品の期待値など心理的な制約もある。このような制約をどう解いていくのが〔共通事項〕をより生かした授業展開につながる。そのため、教師側の概念的制約をできるだけはずして考えることから出発したいものである。

事例の題材における1本の木の枝、というのは、材料に関する制約条件であるが、これは学習の出発点を同じにする点で重要ではあるが、複数の木の枝を束ねて群落のような構成をすると、子どもたちのイメージはまた変化する。「森の木の上を自由に動き回るすまかがあるとおもしろいにな」、「いろいろな木にすまかがつり下げられているとゆらゆらするすまかになるよ」、「森の上をびよんびよん飛び跳ねるすまかなんてどう」など発想が変容する。「イメージをもつこと」は、こうしたイメージの拡張、あるいは変容を期待するものでなくてはならない。

### 3. 造形遊び授業(高学年)における〔共通事項〕とイメージの変容

次に「もこもこ・ふわふわゴーパーゴーパーポリ袋を使って」という造形遊びの事例に関する授業改善の視点を〔共通事項〕をふまえて考えてみることにする。



この題材は、材料条件としてのポリ袋(45ℓ)を自由につないで、最終的に送風機で風を送り、膨らんだ形をもとにさらに活動を展開することを期待するものである。学年としての適時性はここでは触れないことにする。

まず、題材名については、レトリックから反復法、声喩が使用されており、イメージの喚起と身体性の関わりを示唆するとともに興味・関心を引き出すものとなっている。

この題材発想の基本的な要素としては以下のものが挙げられる。

様態＝面材(ポリ袋)、  
可変性  
操作＝伸展、接合  
感覚＝テクスチャー  
身体＝包む、抱きしめる、飛ぶ  
こうした要素をもと

に、つなぐ行為が発展してイメージを生成し、つながれたポリ袋が風で膨らむことでさらにイメージが変容することが予想される。しかし、教師の題材発想の起点となった造形イメージがどのようなものであったかによって、展開の方向性はかなり異なってくる。パレードで使用されるようなバルーンのようなものであったか、あるいは連続した造形イメージであったかにもよるし、ポリ袋の中を子どもたちが通り抜けるような身体活動を想定したかどうかによっても、活動のベクトルは異なる。いずれにしても、静的なイメージではなく、手の操作(つなぐ行為)をもとに身体での関わりを意識した動的イメージを予期したものである。そのために、動的イメージを拡張するために材料、サイズ、様態などの視点で十分検討しておくことが望ましい。

材料との出会いで言えば、サイズや色、透明度などによってイメージが変化する。「ポリ袋だ」【材料からの発想】、「つないでみよう」「空気を入れてみよう」【操作】、「ふうせんみたいだよ」【見立て】、「何かきもちいい」【感覚】、「なにかできそうかな」【発想】、「押さえ方で形が変わるよ」【操作】、「うさちゃんに見えてきた」【見立て】、「押さえ方を変えるとどんなになるかな」【操作・試行・見立て】、「中に何か入れるとおもしろそうだ」【発想】など様々な可能性をもっている。

実際の事例では、どうしても送風機で風を起こしてつながれたポリ袋を膨らませて起きあがらせたいバルーン状の形態を鑑賞することで終わりがち



である。しかし、膨らむ過程で子どもたちはそのポリ袋を抱きしめたり、下からたたいてボール遊びのようにしたりする身体的な関わりがみられた。このような材料との関わりなど様々な視点で事前の教材研究をすることが〔共通事項〕の一方的な押さえにとどまるのではなく、形、色、イメージの豊かな広がりをもつ有意義にするためにも重要になる。

### 4. 鑑賞授業(高学年)における〔共通事項〕とイメージの変容

「机の上にピョコッ」は、美術作家(池田朗子氏)の作品鑑賞をもとに表現へとつなげる実践である。発想の起点としては、教師が作家の写真をもとにした作品から着想を得て、鑑賞した後に、自分たちのお気に入りの写真を持ち寄り、そこから作家と同様の技法をシミュレーションして表現活動に展開しようとするものである。



鑑賞自体は対話型鑑賞によって自由に発話と対話を行わせて写真を活用した作品について多様な意見を引き出させた。

その後、机上(平面)に置かれた写真→「ピョコッ」という切り出し、切り起こす操作(平面から立体へ)→置く(見立て)という展開がなされた。しかし、この設定は、作家の作品に依拠しているために、表現の場の条件として机上のみに限定したことなどが子どもたちの見立てや場の再構成を限定することになってしまったことが残念である。この題材開発で検討される要素には以下のものがあるが、類似題材の可能性を含めて子どもたちの形や色に対する意識やイメージの質的変容を期待するアプローチを工夫する必要がある。

【造形操作】切り起こす

類似題材＝折って立つ動物(低学年)

構成的操作＝集める、並べる

【目標】平面と立体との往還

【造形認識】見立て、物語化

【類似展開可能性】立版古、ジオラマ、フォトマなど

【意味性】日常的場面の再創造、意識変革

この題材の場合、技法的には、写真を切り起こして、それをジオラマ的な見立てをして物語化



をするのが基本的な路線であり、操作的には低学年でもできるものである。そのために高学年の題材として、写真の持つ魅力をどう伝えるのが非常に重要になる。

写真を切り起こすだけなのか、写真自体を集める、重ねる、束ねる、つなぐなどの造形操作から発想をすることや自分の写真の肖像の切り抜きをもとに様々な場に置くのかによって題材の様相は変化する。後者の場合、リリパット効果(ガリバーのリリパット国訪問に基づく大小対比の相対化)による相対的なサイズの変容が意識化され、日常の場面が別の意味を持つようになる。その際、子どもはその写真に自己を投影して、活動的な物語(ナラティブ)を構成していくことになる。

紙面の関係で詳述できないので、十分意を尽くせないが、〔共通事項〕を意識化することで、こうした題材開発研究(授業研究)の重要性が再浮上する。このことが新学習指導要領の美術授業変革への期待するところでもある。「次の事項を指導する」という表記に惑わされず、子どもの発達特性をふまえた形や色(色彩)、そしてイメージへのこだわりを具現化する努力は、美術教育に立ちほだかる諸課題を解決して、混迷を深める教育状況を変革する力になり得るはずである。

最後に、資料を提供して下さった現場の先生方に紙面を借りてお礼申し上げます。

(ふくもと きんいち)

略歴

1952年生まれ。兵庫教育大学大学院教授・学長特別補佐。専門は美術教育学・図工科・美術科教育。

## 「美を感じる心」を育てる

芸術学者、東京藝術大学准教授 布施 英利

### 1.はじめに

小中学校の授業で、図画工作や美術の時間が減られる傾向にあると聞く。

私は美術大学で教鞭をとる者だが、いわば将来の美大生の供給基盤が減ることであり憂慮している。以前、近くの公園で幼児がサッカーをして遊んでいて、とても上手な子がいて、驚いて見ていると、「あの子はJリーグのジュニア養成クラブに入っている」と聞いた。サッカー業界では、小学校入学前から、すでに人材を確保し、育てている。美術もそうしないと、将来が危うい。

しかし問題は、私たちのような美術業界に生きる人間の、規模が縮小してしまう、という「小さな」ことではない。芸術というのは、私たちの人生にとって、深く重要なものだ。その芸術が、教育の世界から減っていくということは、この世界から芸術が消えていくということにもなる。



いや、世界ではなく、それは「日本で」だけかもしれない。外国の美術館に行くと、小学生の団体が絵の前に坐って、先生の説明を聞いている光景に出くわすこともある。1枚の絵の前で、意見を言い、議論をしてもいる。日本だとなかなか見えない光景だ。このままでは、この国の芸術力は衰退していく。

もちろん、芸術なんていない、という意見もあるだろう。どこかの知事は、図書館以外の公共施設、美術館やコンサートホールなど、ほとんど不要だと威勢よく発言していた。財政状況が厳し

いということもあるだろうが、それだけではなく、おそらく彼は少年時代、図書館しか利用したことがなかったのだろう。クラシック音楽に深く心を動かされたこともなかったのだろう。そんな人間が権力を握るから、美術はますます肩身が狭くなる。図画工作や美術の削減を進めている役人も、やはり受験勉強ばかりして、芸術に心休める時間を少年時代に過ごして来なかったのではないか。このままでは、この傾向はさらに加速していってしまう。



### 2.「美を感じる心」が必要な理由

なぜ、芸術が人生にとって必要なのか。私は、その答えの一つを、芸術家ではなく、科学者のこんな言葉にみいだす。それはノーベル賞を受賞したある物理学者が、その発見に至った経緯を語っていた言葉である。

二つの仮説があった。どちらが正解か分からない。そのとき、どちらを選んだか。その判断基準はどういうものだったか？ 彼は「美しい」方を選んだという。そして後から実験をし、検証をし、理論を立てて、ノーベル賞として評価される研究となった。

科学者がいう「美しい」という感覚は、芸術における「美しい」とは違うかもしれない。もちろん芸術の「美しい」も、それはうわべの「きれい」とは違う。世界の調和を感じ、かつ深い何かが垣間見える。しかしそれは科学でも芸術でも、同じく「美しい」という。言葉が同じなのだから、本質的なところでは同じなのではないか。

ともあれ科学というと、論理的、実証的なものと考えてしまう。もちろんそうだが、しかし重要な発見の場面では、「美を感じる心」がコトを決している。つまり美を感じる心は、人生を生きる力となっている。これは科学研究だけでなく、政治家でも経営者でも、リーダーがある政治的決断、経営判断をするときは同じなのではないか。美を感じる心を持ったリーダーだけが、間違いのない、正しい決断をする力を持つ。

こういう能力は、いわゆる主要5科目を勉強して、受験勉強の技を磨いただけでは身につかない。だから芸術の出番である。なにも上手な絵を描くことが、図画工作や美術教育の目的ではない。問題を解決するための「決断」の力となる美意識、さらには問題そのものを作り設定する想像力や創造力、そのような力を鍛え上げるのは、ほかでもない芸術という教科なのだ。

もう一つ、なぜ芸術が人生にとって必要なのか、その例をあげたい。ロックフェラーや益田鈍翁という人生の成功者の多くが、その成功の果てに、なぜか芸術や美を求めている。どんな良いことか悪いことをして巨万の富を築いたかは知らないが、莫大なお金を手に入れると、最後は美術品の収集に乗り出す人物が多い。アメリカの美術館の主要なコレクションは、そうやって集められ、最後は公共のものとなる。人生に成功して、そこで得た富で、なぜ芸術に手を出すのか。それは「成功」と思われていたビジネスや政治が、それだけでは人間にとって、なにか「足りない」という満たされない思いを喚起するからではないか。だから芸術品を自分のものとする事で、自分のアイデンティティを芸術と一つにし、そこに、人生最後の解答を得ようとする。



ばくなどは、だったら、初めから金儲けなんかには奔走しないで、すばらしい絵を描くことに人生を賭ければいいのではないかと思うが、しかし成功した後に残された人生の時間は短く、老いてできることといえば、持っている金で「買う」以外に芸術と一つになる方法がないということになるのか。ビル・ゲイツでさえも、レオナルド・ダ・ヴィンチのデッサンや手稿をたくさん所有している。つまりは、人生で最高のものは芸術であると証言しているようなものではないか。

科学にとっても、政治にとっても、ビジネスにとっても美や芸術は、重く大切なものだ。だから「うちの子は画家になるわけじゃない」といって、主要5教科の受験勉強にばかり力をいれる親は、自分の子供に人生でいちばん大切な「最後の答え」に出会う機会を奪ってしまっている、とも言える。

画家にならない子供にとっても、美を感じる心を育てることは重要だ。それは、本当の意味での「人間の力」を育てることになるのだから。

### 3.理想の美術教育

では、具体的には、どのような美術教育をすればいいのか。

美術教育の究極の方法、それは、ともかく「本物」に触れさせることである。たとえばピカソは、生涯に数万点の絵を描いた。世界中に、どれだけの数の学校があるのか知らないが、もし各校でピカソの絵を1枚所有しているだけでも、それは子供の美的感性を育てる上で、最高の教材となることだろう。絵とは何か。芸術とは何か。そういう抽象的な問いをするのではなく、絵とはこれだ、芸術とはこれだ、という答えが目の前にある。もちろん、ピカソの絵を見たからといって、すぐにその絵の良さが分かるわけでもないし、感動もしないだろう。

でも重要なのは、何だか分からないけれど、たぶん「すごい」ものがここにある、という感覚を体験することだ。分からないからつまらない。分からないから興味がない。分からないから自分には関係ない。そう思うのではなく、「分からないけど、すごい。たぶん。」そう思う心を育てることが、美を感じる心へと至る第一歩となる。そのた



めには、理想は、本物の名画が、教室にあることだ。

もちろん、小中学校の図工・美術室の壁に、ピカソの絵が掛けてある、ということは現実には不可能だ。個人の家庭で不可能なことを、公共の教育ですべきだが、公共の教育現場でも無理なこともある。学校の横に、ルーヴル美術館やニューヨーク近代美術館があるわけでもない。しかし、教育の現場がすべきことは、この「理想」に少しでも近い環境を作ることである。つまり、美の傑作、美の古典の本質を、子供に伝えることである。その方法としては、美術鑑賞だけでなく、実際の制作体験を通して、本物の美に近づく道筋を指し示すことが、図画工作、美術の教育現場に求められる。

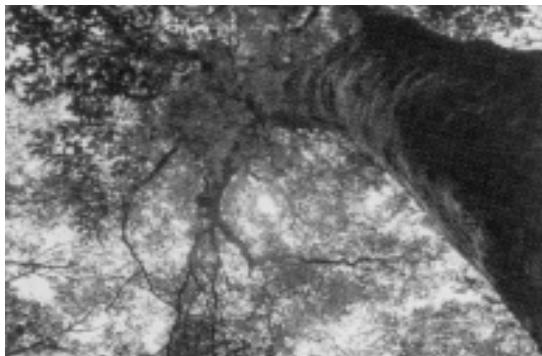
ここで「古典(=クラシック)」ということについて考えたい。古代ギリシャの彫刻や、イタリア・ルネサンスの絵画などが、まずは美術の古典として思い浮かべられる。しかし私は、それらは必ずしも「究極のクラシック」であるとは考えない。ロダンはミケランジェロに美の本質を学んだし、ミケランジェロはギリシャ彫刻に造形の何たるかを教えられた。ではギリシャの美術が、本物の古典なのか。

「ギリシャの建築も彫刻も、ギリシャの光で見ないと、その本質はわからない」などとも言われる。ならばルーヴル美術館や大英博物館でギリシャ彫刻を見るだけでも不十分なのか。近頃は、日本の高校生がルーヴル美術館に修学旅行に来ている姿を見かけることもある。でももっと本物を追究するなら、アテネやオリュンピアの遺跡まで旅しないといけないのか、となる。さらにギリシャ美術の前には、古代エジプト美術があり、本当の古典は、そこで生まれたとも言われる。さらには、アルタミラやラスコーの洞窟壁画もある。たしかに、あの暗い洞窟の、うねるような石の壁面に描かれた絵画こそ最高の美だとも思える。牛や鹿の群れが、ドドドドと大地を蹴って走る音さえ聞こえてきそうなほどの迫力ある絵だ。絵画とは、こういうものかと思う。

しかし私は、そういう古典のさらに前に、「究極の古典」というべきものがあつたと考えている。それを一言でいえば「自然」である。空からの光、花や鳥といった生き物、川の流れ、そういう自然

を目にして、感動して、たくさんの情報を得て、そこから美術は生まれた。だから、美術教育においても、「美を自然から学ぶ」ことが、なにより重要だと考える。それに自然はどこにでもある。ルーヴル美術館やピラミッドやアルタミラ洞窟に行かなくても、この上なく美しい夕焼け空を見ることができし、鏡をのぞけば自分の顔があり、そこに「万物の尺度」である、人間の姿が映っている。

そのような自然から、無限ともいえる情報量を読み取り、それを取捨選択し、調和のとれた美を画面の中に作りだそうと努力する。ときには名画を見て、その「道しるべ」を感じる。そういうことの繰り返しのなかから、美を感じる心は育つ。



#### 4. 美の最高の教師は「自然」である

私は、東京藝術大学で「美術解剖学研究室」というのを担当している。ここは、いわば芸大の理科室のようなところで、将来、画家や彫刻家やデザイナーを目指す若者が、この研究室で「自然」に触れ、自然に向かうまなざしや姿勢を養い、自身の創作の土台として日々修練をしている。

美は「自然」に学ぶ。美の最高の教師は「自然」だ。それが私の言いたいことだ。

しかし都会には、町の中の学校には、身近な自然などない。子供をどこに連れていけばいいのか。そんな



思いをいただく先生もいるかもしれない。しかし自然は、どこにでもある。窓の外を眺めると、空に雲が浮いている。机の上を見れば、窓から差し込んだ光が、影を作っている。それも本物の、第一級の自然である。

ここでは「光」に関わる、私の美術教育の方法を、一つ紹介したい。私が出演・監修した教育ビデオに『自然の中の絵画教室』(紀伊国屋書店)というのがある。3巻あつて、第1巻が「海の教室」、第2巻が「森の教室」、第3巻が「空の教室」で、光をめぐる美術教育の具体的なやり方は、この第3巻「空の教室」の中で実演している。

こんな内容だ。白いコーヒーカップに光があたっている。それを鉛筆でデッサンする。なにもアドバイスをしないで、まずは一枚描いてもらう。次に、自由に、めちゃくちゃな絵を描いてもらう。カップが、埴輪のように踊っている形になっているものもあるだろうし、がちゃんと割れてもいい。ともかく、絵を描く楽しさ、想像する自由さを味わってもらおう。次に、「影」についての説明をする。影を良く見て、その影だけを描く。ここでは、コップの形の輪郭線などは描かなくてもいい。ともかく、目に入った影を描く。そして次に、光源を移動する。するとコップの形は変わらないが、影は激変する。そのとき光と影というのが、いかに移ろいやすいか、いっぽうのコップというのが不変であり普遍であるかを実感してもらい、それを描く。

そんなデッサンを何枚か描いた後に、もう一度、しっかりとコーヒーカップを描いてもらう。そうすると、初めに描いた一枚とは全くちがう、はるかに上達したコーヒーカップが描かれる。ほっと一息したくなるような安らぎさえも伝わってくる絵を描く子もいる。詳しくは、ビデオの中のレッスン



をみていただきたいが、小学生であっても、そんなほんのちょっとのレッスンで絵が変わる。それは「自然」というものを感じ取り、調和と美をしっかりとりえられるようになったことによる。

レッスンの方法は、他にもある。森で「空間」をとらえる感覚を磨く。海で、動きや形についての感性を鋭くする。自然を教師にして、子供は子供なりに、そしてプロの芸術家もプロらしく、自分の絵画をより良いものにする。すべては「自然」から学ぶのだ。



#### 5. おわりに

美を感じる心は、人生の力となる。それは芸術というものが、普遍的で、時代の流れにも不変な力を持っているからである。なにしろ古代ギリシャでもルネサンス絵画でも、何百年も何千年も昔のものが、いまでも私たちの心を打つ力をもっているのだ。科学技術でも政治でも富でも、それだけの長い命をもっているものはない。

人生は短く、芸術は長い。だからこそ、長期的な観点から「美を感じる心」を育てていかなければいけない。即効性はないが、本当の力になる。それが芸術なのだ。(ふせ ひでと)

#### 略歴

1960年生まれ。東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。同大学院修了(美術解剖学専攻)。学術博士。東京大学医学部助手(解剖学)として養老孟司教授のもとで研究・教育に従事した後に現職。人体や自然の美と、芸術の美の探究に取り組んでおり、大学院在学中の『脳の中の美術館』でデビュー。主な著書には、『絵筆のいらぬ絵画教室』『自然の中の絵画教室』『マンガを解剖する』『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』『君はピカソを知っているか』など。新刊に『京都美術鑑賞入門』(ちくまプリマー新書)がある。

# 子どもの椅子

FROM

東京都中野区立本郷小学校  
佐藤 ひろみ



## 図工で何ができるかな？

—80周年おめでとう—

「今年は、秋に学校で大きな行事があります。何だろうね？」年度初めの図工の授業で子ども達に声をかけました。「何か図工でやるのかな？」と期待混じりの声。「周年行事があって、80歳の誕生日のお祝いします。図工でもチャレンジしてみよう。」

ということで、1年生から6年生まで各学年に合わせて展示する内容をみんなで決めていきました。

1年生は、〔鍋横通りの野外周年旗〕です。不織布に自分の顔（お祝いしている表情）を描きました。「先生、みてみて、この顔

どう？」「ニコニコしていて君の雰囲気そっくり!!」鏡を見て描かなくても、自分なりに一生懸命手を動かし表現していくうちに、特徴をとらえた顔を完成させています。

2年生も周年旗の製作です。「学校の教材園にある草花を描いてみよう。」と声をかけました。桜や朝顔や菊をイメージして描いている子や、樹木を描き、そのうちに、カブトムシや蝶やへびまで登場してきました。

「先生、鳥や他のものも描いていいの？」と聞いてきます。「もちろん!! 先生に見せて。」と答えると、「やったー!! ○○を描くぞ。」と張り切って次の表現に向かいます。子どもの性格や気質もそれぞれで、大人との関わり

りを強く求める子や自分を強く持って表現に向かっていく子など様々です。

3年生は、教材園で育つキウイの葉とソメイヨシノの枝を煮沸して「ハンカチの染めもの」の授業を行いました。「学校の庭にある葉や枝で染めものが出来るなんてすごいなあ。」「昔の人は、こうやって糸や布に色をつけていたんだなあ。」と身近な自然の材料で自然の色を抽出して出来る色に触れて驚き、授業から多くの事を学び、楽しく学習しました。

4年生は、2種類の銀紙（マットな紙と光沢のある紙）を利用して、B4サイズの蝶をつくり体育館の壇上とギャラリーに飾りました。「わあ!! かわいい幼

虫ね。どこで見つけたの?」「教材園のミカンの木にいたの。」彼らは3年生の時に、学校でアゲハを育てたり観察したことがあるので、蝶は身近な昆虫です。図工でつくる蝶は、自分の創造力を生かして自分のイメージで色や形をつくり上げていきます。

蝶の展示は、会場係の5年生に手伝ってもらい、大人が何人か立ち会い、ギャラリーに貼りつける方法をとりました。「蝶が生きているように、舞っているように飾った方が素敵じゃない?」と周りからアドバイスがあり、ウェーブが感じられるような展示の仕方をしました。下から見て指示を出す者、それぞれ子どもも大人も作品を会場に効果的に展示しようと頑張りま

した。

5年生は、会場の出入り口に大きな看板をつくりました。「本郷小といえば、まず蜂だよ!! 蜂をつくってみたい。あとは筍、トマト、ピーマン、大根…」とペーパークラフトで教材園に育つ草木や生物を表現する事になりました。

6年生は、地域の商店街に自分達で考えた木工作品を展示しました。「このお店には、このくらいの大きさで色も△色がいいよ。」子ども達同士でアイデアを出し合いながら製作しました。

周年行事に絡めて子ども達は、表現の広がりや人との関わりを色々な場面で経験しました。

(さとう ひろみ)

## 図工室

## 美術室

### 「子どもたちへのメッセージ」

石川 照代(大分県大分市立南大分小学校)

「先生、どう描けばいいかわかりません。」

Aさんは4年生の女の子。学級開きの翌日、自己紹介のためのワークシートの似顔絵。Aさんの紙には、何度も何度も消した跡が残っていた。

「出来映えを気にしないで。これは似てなくてもいいし、漫画風でもいいのよ。顔の形はこんな感じでどう?」

そう言って薄く輪郭線を引いてあげた。頷いて席に戻るAさん。しかし、結局Aさんは、隅っこに小さく、丸に棒線をつけた「棒人間」を描いて出した。

かつて、鏡を前にしても自分の顔を見つめられない男の子がいた。鏡を見ているのに、何度描いてもキャラクターの顔になる。その子は、ありのままの自

分を出せないで、周囲とのトラブルを繰り返していた。Aさんは、逆にあまり人と関わろうとしない子である。二人ともありのまま、見たままの「自分」を受け入れられない、そして出せないからではないかと考えた。

私は、「私の顔を描こう」という題材から1年をスタートすることにしている。まず、「自分」の顔と向き合い、よく見ることを経験させる。子どもの表現への姿勢や技術面のレディネスをつかむ意図もある。Aさんは、口を真一文字に結んで、鏡を見ながらゆっくりゆっく

りと描いた。とても硬い線である。しかし、描き上げたAさんは、満足そうだった。

それからのAさんは、やはり慎重ではあるものの、どんな題材でも自分なりの作品を丁寧に仕上げている。

「子どもは描く人である。」しかし、描けない子どもたちが確かにいる。「あなたが、見たまま、感じたままに描いていいんだよ。」というメッセージが、子どもたちには必要だと思う。

(いしかわ てるよ)

### 子どもらしさにみる「本物の“学ぶ”楽しさ」

平賀 卓也(静岡県浜松市立浜北北部中学校)

昨年8月、県教育研究会主催の研究発表を地元浜松市で盛況のうちに終えた。市町村合併により広域化した浜松市で2年越しの研究は多忙を極めた。

そのような中で小中学校の多くの先生方と出会えたのは、自分への何よりの“ご褒美”でもあった。小中合同の研修は、その必要を唱えつつも機会を得ることが難しい。図工美術における「本物の楽しさ」を小中一貫の目線で考えることで、専門領域の側面に人間教育としての広がりや豊かさが加わり、今後合同研修への参加者には

図工美術教育の「本物の“学ぶ”楽しさ」が伝わるであろう。

私の住む浜松市天竜区は天竜川を遡り、北遠と呼ばれる山々を背にした地域だ。近年、過疎化が加速しているこの地で子どもの実態を尋ねると、必ず人間関係の希薄さと表現力の乏しさが挙がる。少子化により地域や家庭は過保護になり、体験が不足していないかなどの原因を指摘する声だ。幼少のころから限られた遊び仲間の人間関係には様々な憶測が立つ。表現力や逞しさは確かに不足しているかもしれない。でも心

や表情は豊かだ。世代間交流を通して子どもたちは多くの人とふれあい、学び、子どもらしく生きている。

人は生まれたときから泣き、笑い、怒り、喜び、自己を主張し成長する。むしろ田舎の子どもは“体験豊か”だ。昨年11月、兵庫県丹波市で行われた研究発表会に参加し、作品を通して表情豊かな子供の姿を思い浮かべ、その想いを噛みしめた。

大切なのは子どもたちへのかかわり方なのだろう。先の研修会でもかかわり方が「本物の楽しさ」につながる鍵であった。

我々教師も教科や幼小中の壁にこだわらず、多くのかかわりの中で広く、深く学びたい。

(ひらが たくや)

# 丸太カムで初心にかえる！

京都文教短期大学助教授・京都市教委指導主事 中田 隆幸

## 1. はじめに

「絵に画いた餅は食えぬ」というが、絵に画いたカム・クランクは動かない！

いろいろな指導書や参考書を見てきたが、各地の実践報告書を見ても、カム・クランクの授業の成功例は、不幸にしてお目にかかったことはない。

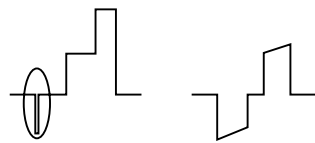
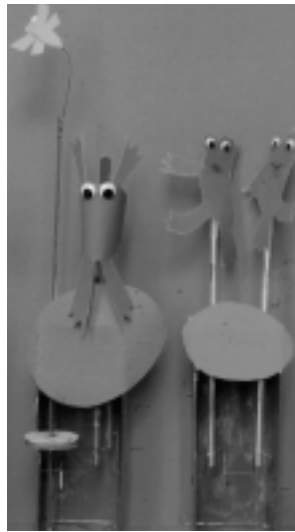
京都で私は現職(小学校担任)時代、子供との取組みの中でカムやクランクを必要とする動きにいろいろ具体的な仕組みや材料の組み合わせを自然発生的に体験し工夫して開発(?)してきた。

## 2. クランクの開発事例

針金は、18番線か20番線でもよい。動かす「うで」はストローそのものでよい。子供の技術力では、とうてい直角に対称、技術科的なものは、そのつもりでつくっても正確なものは望めないし、むしろその不完全さから起こるいろいろな動きを発見し、それを助長し、表現することの方が図画工作科のねらいであると思う。



丸太を輪切りにして、心棒(竹ヒゴ)を垂直に通して接着剤で固定する。一日そのままにしておくと正確で強力なカムができる…。

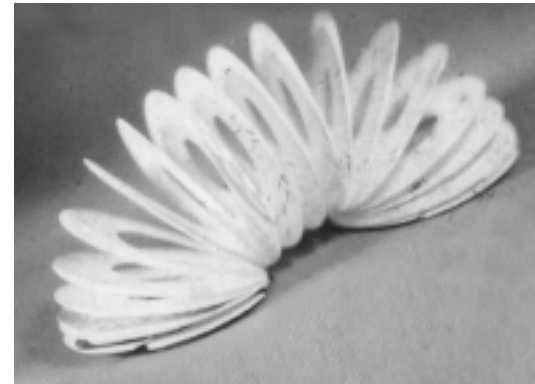


カム・クランク教材で大事なことは、動く仕組みとして箱づくりも大事な要素である。幸い昨今は、牛乳パックや飲料パックが身近で調達できるとにかくやってみること…。できた作品は1週間ほど教室に置いておくと子供たちは補修や追加製作もする。

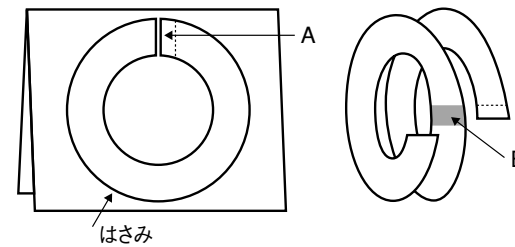
上の作品の左側は二段々差で上がった蛙の舌が更に上へ動く。右側の作品はクランクの取付角度が正確につくれない子供の作品が上へあがった時、蛙の向きが変化した。触っているうちに向かい合ったり、背をむける動きにもなった。遊びの中から子供達は教師の予想外のしごとをしてくれる。子供達は「色と形」を越えて「素材の質と量」の学習を自然発生的に開拓している。

## 3. でんぐりがえる

板で斜面をつくり、上方から下方に向かって発進させると生き物のようにはね動く！



年賀状等の古葉書を二つ折にして円形に切って(A)、Bのようにつなぎ、両端は同円板をはり、輪ゴムをすべり止めにはりつけ斜面を走らせると、実に面白い動きをする。古い題材ではあるが何処の会場に行っても人気の高い作品である。



低学年では下の写真のように細長く切ったものをつないでもよく動く。

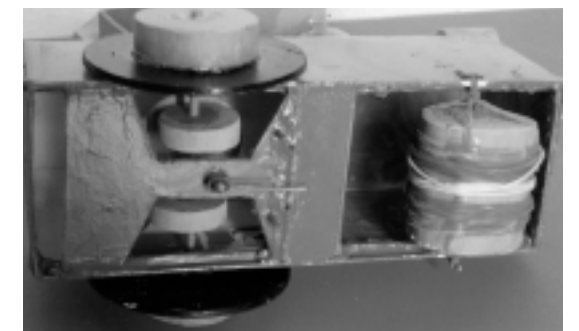


## 4. 丸太でもつくれる千里ぐるま

フィルムケースで動力源をつくっていたが、フィルムケースが入手しにくい昨今、他の空き缶、

空きびん等々、丸太でもつくれる。

探してみると身の回りにはまだまだ使える物がある。動くおもちゃもつくりたいが「材料が無い」とよく聞かすが、やる気になれば何でも利用できる。問題は教師のやる気の無さが他の工作も含めて不振に追い込んでいる。「やったー」「動いたー」歓声の上がる授業は、この領域のいのちである。私がいろいろ攻撃(?)されている時、サトウハチロー氏が「京都の機工」TV番組で「動くものには生命がある」と絶賛して下さいました。京都の機工創設以来50年「継続は力!」「学問はあとからついてくる」。京都大学美学研修での結論である。



素材の質と量(重さも含む)の自然発生的学習こそが、工作の重要な学習内容と考える！

(なかた たかゆき)

※編集部注：著者は2009年度瑞宝双光章を叙勲されました。



# こころを開放する題材の工夫

## ～自分のイメージを表現する試み～

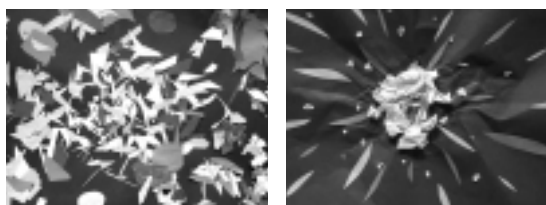
山形県山形市立第十中学校 庄司 雅和

### 1. はじめに

最近、中学生のこころが堅い印象を受ける。人や環境とうまく関わることができない、または自らの意志で関わろうとしない子どもが増えてきた。そうした要因の一つに実体験や経験といった活動が不足しているとも言われるが、その問題の根っこで、子ども達のこころが開放されていないことを強く感じる。山形に住む中学生も決して例外ではなく、自分をさらけ出して素直に表現することが苦手である。こころを開放させるような要素を含んだ授業を展開し、発想やイメージする力を喚起し補うにはどうしたらよいか考えてみた。

### 2. 感情を開放する

人間にある「喜怒哀楽」の感情、すなわち自分の内面の「こころ模様」を表現してみた。材料は、色紙やアルミホイル、ビーズなどである。今回は1年生と3年生で実施した。



上図左は1年生の「哀」がテーマの作品である。哀しみで細切れになるこころを繊細に表し、その時の感情を思い起こし、自分のこころの奥底の模様をストレートに紙の上に表現している。上図右は3年生の同じく「哀」がテーマの作品である。3年生では、自己表現にも複雑なこころの要素が絡み、手の巧緻性も上がることで、作品の質も高まり、何かを象徴した作品が多い。1年生では哀しみを、とても一般的に捉えていたのが、3年生

では自分自身のこころと深く対面できるようになり、まさに今の自分の姿を表現しようとするようである。台紙の紙にも変化を付けて、中心に自分の心そのものを表している。哀しみではじけ飛ぶこころを、素直に表現し、色と形で自分のこころの奥底にある何かを表そうとしているのがわかる。

### 3. 自分の生活に目を向ける

自分の生活環境に目を向けさせることを通して、自分が何を感じながら毎日を生きているのかを、実感として感じてもらうのがねらいである。四季からイメージするものや、色、音、光、匂いなどの季節感を子ども達の中で自由に語らせ、自分の得意な手法で各季節を絵に表現してみた。それが次である。対象は1年生。



この時に使用した用紙のサイズが、はがきサイズということもあり、無理なく描けるのか、一人で何枚も描く姿が見られた。またそのどれもが生き生きとしており、まさに子ども達の際限のない豊かな発想力、イメージする能力に触れた思いであった。こうしたイメージ画が積み重ねられ、次への作品の基礎になることは言うまでもないが、むしろ思い付いて発想する活動が、こころを開放し、そのことが作品を完成させることよりも重要な学習の営みになっていると感じた。例えば、こうしたイメージ画を積み上げてできたのが、次のような作品である。



### 4. 表情のある「自分像」を制作する

こころが開放されていなければ、自分自身の姿は描けない。2年生を対象に、表情のある自分像に挑戦した。どんな表情をつくったらいいかわからない。自分らしさって何？ 表情をつくるのが恥ずかしい。全て予想通りの反応だった。「じゃあどうする。」「自分を知ることから始めてみっか。」まずは、友達との関わりの中から、自分でも知らなかった自分を知ることから始めた。

子ども達は、友達から寄せられた意見から、意外な自分の一面に驚き、見られている自分というものを客観的に知ることとなる。自分でも薄々気付いてはいたけれども、はっきりとはわからなかった自分自身と正面から向き合い自己分析を重ね、自分らしい表情を考えてみた。笑っている表情もあれば、しかめっ面の表情もある。ぐっと内面に入り込んだ場面であった。表情があることばかりが決してよいとは考えてはいないが、今回のねらいはあくまで自分らしさを表情に表すことである。無表情の中にも、奥深い表情があると思う。しかし、こころの中にある自分というイメージは必ず表情に表れると考えた。ここまで段階を踏み手立てを講じ丁寧に授業を進めなければ、なかなか子ども達はこころを開かないのが現実である。

また今回は、表情を決定していく補助的なものとして、デジタルカメラで自分の顔を撮って確認することも、学習過程の中に盛り込んだ。こうすることで自分の表情を客観的に見て、しわの付き方や、頬の上がり具合、筋肉の様子などを確かめながら制作を進めることができた。



どの作品も、思った以上に生き生きしており、様々な表情の中にもこそ自分らしさを発見しているようであった。こころを開放させることは容易なことではない。しかし、一人ひとりの自己表現への欲求は強く感じられ、なんとか自分の中にあるイメージを、紙の上に形と色で表そうとする前向きな姿勢が見て取れた。

### 5. おわりに

私のこれまでの授業を振りかえると、表出する現象面の作品だけで判断し、よく描かせようとか、描くコツを教え、手本を示して一方的な指導で作品をつくらせてきたように感じる。どうしても作品中心主義の授業が展開され、これは子どもにとって、本当の意味で力を身に付けたとはいえなかった。

表現や鑑賞の活動は、自分ともの(環境を含む)や、人との間で、働きかけ、働きかけられる(感受)関係によって成り立つとされる。

一連の学習過程の中で、自分のイメージと関連づけて新しい発想や方法などをつくりだすのが創造的活動とするならば、このイメージを、想像力豊かにふくらませることは、造形活動で育むべき大切な基礎的な能力の一つであると言える。

今後も、こころを開放し、イメージを大切にしたい授業展開の試みから、従来の授業の進め方、指導内容を見直し改善を図りたいと考える。

(しょうじ まさかず)



# ふいて、たたいて、おどろう「ねぶた」!

北海道斜里町立斜里小学校 石橋 一郎

## 1. はじめに

西暦1804年、対ロシア対策として、北方の警備を任された津軽藩藩士が斜里に駐屯した。しかし、あまりにも過酷なオホーツクの冬に適応できず、本来の責務を果たすことなく72名が無念の死を遂げた。その後、斜里町での慰霊碑建立の気運が高まり、昭和48年受難慰霊碑が建立。さらに、昭和58年に弘前市との友好都市盟約が締結され、この年から第1回知床ねぶたが開催され今日に至っている。

斜里小学校は連続22回の運行を重ねている。ここでは全校をあげての取り組みについて紹介していきたい。



## 2. 取り組みについて

ねぶたへの取り組みについては、総合的な学習の時間を中心に取り組みを進めている。

### (1) 単元のねらい

- ・「ねぶた」への参加を通して、地域の特色や伝統を知り、その楽しさに気づく。〈低、中学年〉
- ・自分たちの地域の特色を知り、実際に体験することにより、地域に対する関わり方について考えを深め、自ら活動することができる。〈高学年〉

### (2) 学習構造図

#### 【授業時数】

- 1・2年生～18時間  
(制作10h、踊り6h、ねぶたについて2h)
- 3・4年生～22時間  
(制作12h、お囃子8h、ねぶたについて2h)

- 5年生～17時間  
(制作6h、お囃子8h、片付1h、ねぶたについて2h)
- 6年生～23時間  
(制作12h、お囃子8h、片付1h、ねぶたについて2h)
- 【制作】
- 1・2年生～うちわ・ねぶた金魚・はちまき
- 3年生～前ねぶた
- 4年生～額絵・肩・大雲
- 5年生～ひらき
- 6年生～鏡・送り・送り絵額・そで
- ・低学年では図工・生活科も活用

## 知床斜里ねぶた出陣!

【お囃子】	【ねぶたについて】
1・2年生～おどり	1・2年生
3・5年生～笛、たいこ	ねぶたってなにをするの?
4年生～笛	3・4年生
6年生～笛、じゃがらき	ねぶたってなあに?
お囃子演奏については音楽の和奏の部分との関わりを持たせカリキュラムに位置づける。	5・6年生
	なぜ斜里でねぶたを?
	ねぶたについての由来や弘前との関わりなど、歴史的経緯を学習する。

## 3. 斜里小ねぶた館

斜里小学校の2階の一室に、本校のねぶたの歴史や作品を展示する場を設けている。伝統的な作品に触れ、作る楽しさや地域の伝統行事に参加することのすばらしさや楽しさを子どもたちに伝えている。(いしばし いちろう)



## 造形ピックアップ

# 本の紹介『新しい表現活動への挑戦 —墨の美を美術教育に生かす—』

墨アートプロジェクト代表 松崎 としよ

### ◆墨アートプロジェクトの活動

墨アートプロジェクトは、画材としての墨の可能性を追究し、伝統・文化の素晴らしさを、教育を通して広げていきたいと願って活動をしている団体です。また、幅広い国際交流を願い、世界に「墨アート」の魅力を紹介しています。

(\*「墨アート」とは墨を画材として使った美術の表現活動を総称したものです。)

2008年8月には大阪で開催されたInSEA(世界美術教育学会)においても、「墨アート」のワークショップと研究発表を行う機会を得ました。「世界へ広がれ墨アート!」の願いはInSEAの大会メインテーマである「心Mind+メディアMedia+伝統Heritage」にのっとったものでもあり、多くの人達の心に届けられました。

### ◆「墨アート」の本の発行

InSEAにあわせて、「墨アート」の本『新しい表現活動への挑戦—墨の美を美術教育へ生かす—』を発行しました。「文字を書くだけでなく、アートとしての墨表現を体験して欲しい」という願いのもと、図画工作科や総合学習の時間に指導のガイドブックとして活用できる本にしました。表現手順や参考作品の写真も多く掲載されています。海外の方にも紹介したいと考え、英文も添えてあります。是非ご活用ください。



著者 墨アートプロジェクト

価格 1,970円(税込み+送料80円)

☆送料は冊数に関係なく80円です。

### ◆「墨アート」のホームページ

<http://sumi-art.hp.infoseek.co.jp/>

(まつぎき としよ)

### 「墨アート」の本の連絡先

○申し込みホームページのアドレス

<http://sumi-art.hp.infoseek.co.jp/book/sumi-art/>

○Faxで申し込む場合

072-792-3991(墨アートプロジェクト 森)